

報告書原稿

第 16 回

バイオフィリア リハビリテーション学会総会予稿集

大会長：松岡幸次郎

日時：平成 24 年 8 月 25 日（土） 9：00－17：00

場所：淑徳大学みずほ台キャンパス

研修会 平成 24 年 8 月 26 日（日） 9：00－15：00

場所：藤沢市善行 7-5-4（バイオフィリアリハビリテーション学会会議室）

主催

NPO 法人バイオフィリアリハビリテーション学会

共催

NPO 法人高齢市民が活躍するための社会技術研究会 (International Biophilia Rehabilitation Academy)

後援

厚生労働省	埼玉県
三芳町	三芳町教育委員会
公益財団法人テクノエイド協会	公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会
公益社団法人全国老人保健施設協会	公益社団法人日本理学療法士協会
一般社団法人日本作業療法士協会	一般社団法人日本リハビリテーション工学協会
日本生活支援工学会	

発行日 平成 24 年 8 月 25 日

バイオフィリアリハビリテーション学会

〒252-0804 神奈川県藤沢市湘南台 4-24-5

本年度の公開講座開催は「公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団」の助成を得ました。

報告書原稿

第 16 回バイオフィリア リハビリテーション学会予稿集 (2012 年)

介護依存から自立へ

目次

(公開)

大会会長挨拶	1
松岡幸次郎 淑徳大学国際コミュニケーション学部教授	
学会会長挨拶 「第 16 回バイオフィリアリハビリテーション学会開催にあたって」	2
白澤卓二 順天堂大学大学院加齢制御医学講座教授	
実行委員長挨拶 「ご挨拶」	3
滝沢茂男 バイオフィリアリハビリテーション学会常務理事	
次年度大会会長挨拶	4
田中敏幸 慶應義塾大学理工学部教授	
基調講演 1 「ビジネスと社会貢献」	5
松岡幸次郎 淑徳大学経営コミュニケーション学部教授	
基調講演 2 「これからのリハビリテーション」	7
木村哲彦 バイオフィリアリハビリテーション学会名誉会長	

報告書原稿

公開市民講座

- 講演 1** 「100歳まで足腰が衰えない生活習慣」 9
白澤 卓二
順天堂大学大学院加齢制御医学講座教授
- 講演 2** 「希望の革命始まるー超高齢社会を持続可能にするために」 10
滝沢茂男
国際バイオフィリアリハビリテーション学会理事長
文部科学省指定研究機関バイオフィリア研究所教授
- 招待講演** 「日本の社会保障制度と期待されるシナリオ」 11
尾澤潤一
バイオフィリアリハビリテーション学会理事
- 招待講演** 「CONFERENCE GREETINGS 国際学会の活動」 12
Mieczyslaw Pokorski,
International Biophilia Rehabilitation Academy
Polish Academy of sciences, Warsaw, Poland

第16回バイオフィリアリハビリテーション学会大会のご案内

介護依存から自立へ

リハビリテーション医学の再構築を目指す本年の大会は「公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団」の助成を得ましたので、基調講演、公開講座、招待講演は無料でご参加可能です。

申し込みはFAX(宛先0466-30-4552：氏名・住所・電話番号記入)又はWEBからお願いします。(先着100名)
(メッセージ欄に公開講座と記入してください。) <http://biophilia.info/postmail/postmail.html>

●平成24年8月25日(総会・学術集会)、26日研修会

場所：淑徳大学（淑徳大学みずほ台キャンパス）

■主催： バイオフィリアリハビリテーション学会

■共催： NPO高齢市民が活躍するための社会技術研究会

■後援： 厚生労働省・埼玉県・三芳町・三芳町教育委員会

公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会・公益財団法人テクノエイド協会・公益社団法人全国老人保健施設協会・公益社団法人日本理学療法士協会・一般社団法人日本作業療法士協会・一般社団法人日本リハビリテーション工学協会・日本生活支援工学会

内容

（9：30より）基調講演・公開市民講座・招待講演（詳細以下の通り）

演題発表（4演題）（15：30～）

2日目 初級創動運動指導員研修講座（08：30～14：30）

—現在まで応募はありません—

基調講演（9：30～11：45）

ビジネスと社会貢献

淑徳大学国際コミュニケーション学部 教授松岡幸次郎(公開)



介護保険も含めて寝たきり高齢者の施策は、社会持続の大きな問題である。当学会は長年にわたり、寝たきりの高齢者をなくすリハビリ手法の普及を実践してきた。リハビリ機器の開発の一方、手法の普及や高齢化社会への対応活動をしてきた。超高齢社会持続への提案を試みたい。

これからのリハビリテーション

名誉会長木村哲彦(公開)



少子高齢化はもとより、世帯構成人員は激減し、特殊出生率も1.3を割りっぱなし。医学の進歩は、基礎科学にまで及び生命体そのものの科学になってきた。ロコモ（高齢を主にした運動機能障害）、メタボ（代謝障害による成人病）、の激増、医療技術進歩とそれに伴う診断治療費の高騰、リハビリテーションも予防的要素が大きくなりました。

招待講演（11：45～12：00）（公開）

第17回大会ご挨拶

（日程2013年8月31日・慶應義塾大学（日吉）来往舎）

次年度大会長 慶應義塾大学理工学部 教授田中敏幸



2013年に開催される第17回大会の大会長をお引き受けすることになりました。研究発表と交流を通じて、第17回大会がリハビリの分野での新たなイノベーションを興す機会になればと思います。



公開市民講座（13：00～14：45）

100歳で元気に活躍

学会会長（理事長） 順天堂大学加齢制御医学講座 教授 白澤卓二



100歳で元気に活躍していた皆さんの医学的データを提示し、どのような運動が高齢期のQOLを支えているのかを検証する。更に転倒・骨折の発症基盤にある骨粗鬆症を予防する為に、ウォーキングなどの定期的な運動が有効である事を示す疫学的調査を紹介する。

超高齢社会を持続可能にするために

国際学会理事長 バイオフィリア研究所 教授 滝沢茂男



超高齢社会を持続可能にするために、これまで「現在のリハビリテーション医学のリストラが必要だ」、と公に述べたものは私一人でした。新たに発行したジャーナル「BIOPHILIA」紙上で、著名な医師が意見表明をしました。誰でもどこでも当学会から巣立つ指導員の指導の下に効果的なリハビリが実現できる。そこから、「高齢者がいつまでも元気に社会貢献する新たな生活文化を実現できる」、と確信しています。

招待講演（14：45～15：15）（公開）

日本の社会保障制度と期待されるシナリオ

学会理事 尾澤潤一



社会保障と税の一体改革が進められる中で、日本の将来の社会保障制度について未だに不安感を払拭できない。これは、古き良き時代であった成長期を脱し、成熟期に入ったことも背景となっている。社会保障制度やその実施体制が一層複雑化する中で、制度の抜本的な改革や見直しのための提言を試みたい。

招待講演 Closing Remarks



Mietek Pokorski, MD, PhD
Prof. of Medical Research Center, Polish Academy of Sciences

The word 'Biophilia' expresses 'love for living systems' and suggest the existence of an intuitive bond between human beings and all others that is alive. Human nature would thus be embedded into evolutionary biology.



大会会長
淑徳大学
国際コミュニケーション学部教授

松岡幸次郎

第16回 バイオフィリアリハビリテーション学会開催にあたって

今大会は、リハビリテーション医学の21世紀型学問への発展の為に、我々の進める研究に加え、経営学視点から衆知を集めるため開催します。

リハビリテーション医学は施設基準・配置基準による診療報酬システムを多年用いてきました。これは医学に求められる治癒を基準にしない考え方で、違和感を覚える医師も少なくなかったことは事実です。今般、これらの基準に加え、「回復度基準を用いる」との中央医療審議会の動きもあります。リハ医学に大きな転換・転機が訪れようとしていると多くの医療関係者が感じていると思われれます。

我々は多年、創動運動（器具を用い健側主導による両側同方向運動による患側受動（他動運動）による、自律リハ手法を導入した施設の追跡研究を行ってきました。その結果、3割を超える寝たきり状態の患者（利用者）が歩行を再獲得するという成果を明らかにしてきました。この手法を在宅に取り入れることは非常に重要であると考えております。

本大会では、経営学からリハビリテーション医学の発展を可能にしたい、また、脳機能のリハビリテーション医学への反映を明らかにしたいと考えております。

さらに、研修を通じ、自律リハ施行を責任をもって実施できる主体の育成を開始します。（対象：理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・医師・看護師・マッサージ師・介護関係者）



順天堂大学大学院
加齢制御医学講座
教授
白澤卓二

第16回バイオフィリアリハビリテーション学会開催にあたって

第16回のバイオリハビリテーション学会を淑徳大学の松岡幸次郎教授に大会会長をお引き受けいただき、平成24年8月25日に淑徳大学みずほ台キャンパスで開催の運びとなりました。

毎年の学会では、リハビリテーション、リハビリに必要なIT技術、医用工学、分子生物学、医学研究など様々な発表があり、活発な議論で学会も発展を遂げています。今年の学会でも、多くの新しい知見と議論、そして学際的な学术交流が出来る事を期待しています。

今回、大会会長をお引き受けくださった松岡教授は、経営学の専門家で、これからのリハビリテーションに必要な医療経済に関する報告があると思います。今回の学会は、医学、生物学、IT研究を専門にする研究者と経営学を専門にする研究者の学术交流のチャンスと考えます。どうぞ、若い研究者、大学院生や学部の学生さんの積極的な参加を期待しています。

今年の学会では、介護依存から自立をテーマに基調講演を木村哲彦名誉会長にお願いしました。また、午後の公開市民講座では加齢制御とリハビリテーションに関する最近の話題や世界におけるバイオフィリアと超高齢社会に関する報告があります。

多くの皆様の参加を心より期待しています。

ご挨拶

平成5年以来、当学会は会員各位の情熱とご努力で毎年公的な研究費を得て、有効な研究推進・社会貢献を行って参りました。当学会の研究・論文を通じて博士号を取得された方も大分多くなりました。

さて、20年目の本年度は学会開催助成を除き、研究費を獲得できていません。

こうした事態も予期できましたので、常務理事を務めさせていただいている滝沢の拠点であるバイオフィリア研究所を下記へ縮小・移転致しました。

多くの先生方はご存じですが、私は高齢社会の到来を予期し、持続可能で皆が幸せに暮らせる社会構築を、リハ医学改革研究を通じて実現したいと考え、研究や学会活動を推進してきました。時事通信厚生福祉誌に「希望の革命始まる」を題に掲載されましたが、実現の可能性を見いだしましたので、実現促進に、「BIOPHILIA」と名付けた新たな英文誌を国際学会として発行致しました。

また、39歳で志しましたが、知らないうちに65歳の声を聞くようになり、生活資金の心配もあり、このまま研究や学会活動を支え、実施し続けられるかを自問するようになりました。幸い本年は、同級生であり、最初に科研費を共に得た松岡君（淑徳大学教授）が大会長を引き受けてくれました。また来年は、豊かな才能を持ち、将来は「癌の診断技術で大きな賞を取る」と期待している田中教授が慶応日吉で、大会を開催してくれることになりました。

近年は、昨年度学会誌からご理解いただけると存じますが、研究も多岐にわたるようになり、多様な領域で博士論文にも対応できるなど、活動も充実してきました。そろそろこの学会をどのような学会にしていくのかを改めて考えていくべき時期と考えています。

本年は無事開催され、来年の大会は準備が進んでいます。本年来年の総会で今後の方向性を見いだしていただけると幸いです。

下記への移転ですが、2011年9月から引っ越しを始め、まだ完了していませんが、11月には全面移転となります。

252-0804 藤沢市湘南台4-24-5

バイオフィリア研究所

バイオフィリアリハビリテーション学会
常務理事 滝沢茂男



慶應義塾大学 理工学部 物理情報工学科
教授 田中敏幸

第 17 回大会に向けて

2013 年に開催される第 17 回大会の大会長をお引き受けすることになりました。私の研究分野は医用画像解析・パターン計測です。近年、高齢化に伴い多くの病院で患者数が増加する傾向にあります。イメージングによる診断支援としては、fMRI、fNIRS、X 線 CT など最先端の技術を利用した装置が開発されており、それにより診断の精度は格段に上がっています。しかし、患者が増えることによる医師一人あたりの負担は減っていないように思います。医師の負担軽減のためには、画像解析を中心とした診断支援システムが必要不可欠と考え、医用画像処理の研究を進めています。

リハビリの分野でも、高齢化に伴い患者が増加し続けており、一人の患者に対して理学療法士が 1 対 1 で対応する現在のシステムに限界が生じています。今後は、一人の理学療法士が複数の患者に対応する新しいリハビリシステムが必要になります。また、これからの社会では医療費の自己負担額が今まで以上に増加することも予想されるので、病院に行く回数を減らして自宅でもできるリハビリシステムが必要になります。このシステムに必要なのが、リハビリを効果的に行うための器具と、効果的なリハビリを提供するための診断支援システムだと考えています。

研究発表と交流を通じて、第 17 回大会がリハビリの分野での新たなイノベーションを興す機会になればと思います。



ビジネスと社会貢献

淑徳大学 国際コミュニケーション学部

教授 松岡幸次郎

Cause related marketing	Ethical marketing	Mecenat	Philanthropy
企業の社会的責任 (CSR)	Fair trade	持続可能性 (Sustainability)	

1. コーズ・リレーテッド・マーケティングと倫理的マーケティング

企業の社会貢献活動は 1%クラブのように、企業の最終利益から一部を寄付するというのが旧来の日本企業のメセナやフィランソロピーなどでの一般的な手法であったが、「倫理的」マーケティング、「コーズ・リレーテッド」マーケティングという用語が目立ってきた。

コーズ・リレーテッド・マーケティングとは、

社会が直面している健康や環境などのさまざまな問題に関連づけて、企業がキャンペーンを行い、社会的な関心を高めて、経済的・人的に支援することで、結果として営業利益を上げるマーケティング活動。企業としても社会的意識の高い存在として、ブランド形成などで良い影響が得られる。

また社会的問題への関心はあるが、どう表明し、どう活動するのかやり方がわからない人たちに、社会貢献参加のきっかけを作ることにもなる。消費者は買い物を通じて手軽に社会貢献活動に参加できる上に、企業には販売促進に加えて社会的貢献を行う企業として評価を向上することができる。

企業が、単に事業外の社会貢献（メセナやフィランソロピー）ではなく、事業を通じた社会との関わり方、を追求する姿勢は、多くの問題を抱えながら、解決できない現代社会に光明をもたらすと考える。

- ・1981年にアメリカン・エクスプレスが行った、消費者がクレジットカードを利用するごとに1セントを、新規カード加入は1ドルを自由の女神像修復のために寄付する
- ・1980年代から、乳がんの撲滅を訴えるピンクリボンキャンペーン、世界のエイズ・結核・マラリア対策基金に対する支援を行うプロダクト RED など
- ・2007年『ボルヴィック』を買うことで、劣悪な水環境のもとで生活しているアフリカの子どもたちが清潔で安全な水を飲めるようになる、という「1ℓ for 10ℓ」プログラム。「ボルヴィック出荷量1リットルにつき10リットル分の清潔で安全な水が生まれる」
- ・2008年王子ネピアは開発途上国の水と衛生の環境改善を目標にした「nepia 1000のトイレプロジェクト」
- ・2009年アサヒビール「スーパードライをもっと飲んでください。1本につき1円、地元の環境保全のために寄付されます」
- ・2011年セブンリー Sevenly 社会問題の解決をするために設立された。Tシャツを週替わりで22ドルで限定販売し、1枚売れるごとに7ドルを寄付する。フェアトレードで無地のTシャツを作り、飢餓、貧困、水、人種差別、災害、難病、救済の7つのテーマを、毎週デザインして通信販売する。1

枚7ドルをさまざまな団体に寄付する。

このような動きの背景には、消費者の社会貢献に対する意識の高まりがある。内閣府が2010年に行った「社会意識に関する世論調査」によれば、日本人の65.2%が「日頃、社会の一員として何か社会のために役に立ちたい」と考えているようだ。この割合が、10年前は60.7%、20年前は54.1%であったことを考えれば、「倫理的消費」は日本国内で、受け入れやすくなっているのであろう。

P.コトラーのマーケティング3.0でも指摘されているように、機能的価値、情緒的価値ではなく、社会的な価値、社会的規範に配慮した消費が商品選択の重要な基準となってきた。

2. 持続可能な社会と経営

『企業は社会の公器である』P.ドラッカー

企業の目的は、それぞれの企業の外にある。事実、企業は社会の機関であり、その目的は社会にある。企業の目的として有効な定義は一つしかない。すなわち、顧客の創造である。

利益はそれ自体が目的ではなく、会社を存続させていくための手段に過ぎない。利益とは、社会の公器たる企業がその役割を果たしていくための「条件」である。

持続可能性こそが、企業経営の基本命題である。企業の目的は顧客創造である。顧客創造のためには、マーケティングとイノベーションが経営の中核機能となる。マーケティングでニーズをまとめ上げ、形にして、イノベーションによって製品化される。ニーズがわかっても、製品化できるイノベーションが伴わなければならない。

顧客ニーズに合わなければ、顧客に買ってもらえない。現代では基本的には満足していても、社会的にも貢献していれば、大義名分(Cause)が立ち納得しやすい。

3. 持続可能な社会の構築をめざして

当研究会は長年にわたり、寝たきりの高齢者をなくすりハビリ手法の普及を実践してきた。

リハビリ機器の開発の一方、手法の普及や高齢化社会への対応活動をしてきた。

介護保険も含めて寝たきり高齢者の施策は、社会持続の大きな問題である。まさに大義(Cause)である。企業の本業に結び付く Cause として取り組むことができないか、その可能性を考えてみたい。

シームレスなリハビリテーションサービス推進の為に

日本リハビリテーション専門学校
バイオフィリア学会 前理事長
木村 哲彦

保健⇒医療⇒急性期リハビリテーション⇒回復期リハビリテーション⇒生活機能訓練（含介護老人保健施設内生活訓練）⇒療護・療養⇒特別養護・介護、他に救護これらの連携協力が不可欠であるが、一般の施設は、各々が独立した機関として機能していることが多く、必ずしも相互の連携が取れていない場合が多く見られ、介護に関わる福祉分野との連携が不十分な場合が多い。患者・障害者の立場で見れば、医療も療養も、リハビリテーションも保健-医療-福祉の同一線上にあり、区別されるべきものではない。リハビリテーション訓練・指導の機能を持つ機関は必要であり、機能回復を企図する時期と期間は不可欠で、Communityの大小に関わらずUnitとして存在する必要がある。小さくは一法人、或いは、市・区・町・村に於けるNetworkが必用と言ってよい。

Bedridden

寝たきり老人：日本女性1年数ヶ月、男性、数ヶ月。 北欧平均10日以内と言われる。

人道的問題？ 宗教上の問題？ ※在宅死の少ないことと関連有るか？要考察。

介護予防の哲学：保健・医療・福祉を考える

リハビリテーションを妨げる阻害因子である、①栄養の問題、②深刻な医療上の問題としての褥瘡予防、処理、③訓練の必要に呼応した電子・工学的デバイスの類の開発、④日常生活援助に必要な機器、介助介護に必要な福祉用具、機器の開発。その他⑤訓練手法、⑥受動的刺激で結果的に訓練結果を獲得する手技・機器の開発（スキー、乗馬⇒本人は訓練している心算が無くとも、身体バランスをとることのみで筋収縮を誘発し結果的に訓練される）、⑦近代的最先端の機器の活用でEvidenceの明白な訓練手法の開発（MRI, PET, EMG, MEG 既存のハイテク機器を活用する）。

これらのテーマに関心のある者は、団体構成員として職種の規定は無く、医師、歯科医師、看護師、栄養士、PT, OT, ST, ORT, 体育スポーツ専門職、理工学領域研究者統計学者の参画もあり、協力の下にチームを構成して研究に当たっている。

80-20、Active 80、健康日本 21 ⇒健康維持の思想が再び

一方 在宅死亡者看取り激減：世帯数漸増 及び世帯構成人数激減⇒介護保険利用者倍増

再度、地域（在宅）リハが叫ばれ始めた。生活の場に於けるリハビリテーションの重要性認識。

近年設立される施設の多くは富裕層の高齢者を当て込み、介護付き老人ホームとして高額な入所費を請求し、自発的な摂食不能状態になると胃瘻・経管栄養を施す例も多く見られ、それを行わず、誤嚥⇒肺炎での死亡も増加している。

世帯構成人員減少、世帯数増大⇒家族の変化 このことは施設の必要性を高める結果に成っている。維持期リハビリテーションのあり方に変化を来している。ケア付き高齢者住宅等のニーズに対応する必要性が高まり、孤独死など訪問看護、訪問リハビリテーションでは対応不可能な現状も多発しており、配慮を要する段階に至っているのではなからうか。

少子高齢化の結果種々の問題 世帯数増大、家族構成人員の減少とも相俟って、施設に対するニー

ズが高まる結果に成った。

医療技術の進歩と医療費の高騰 医療技術の進歩に呼応して高度な治療検査機器などが多用される結果を招き、リハビリテーション専門職によるより高度で高価な治療技術が駆使されるように成った結果 GDP の7%を遥かに超える結果を招き、更に要求は高まりつつある。

医科学は基礎科学に迄遡る 単に医療分野の解剖学、生理学、生化学、運動が国留まらず、総合的な基礎科学の分野に遡る結果、教育の分野にも変化を来している。

ロコモ対策 メタボ対策 成人病に起因する疾患生涯にかかわるリハビリテーションが小児期のリハビリテーション以上に大きな比重を占める結果に成っている

高度医療技術開発 理工系の技術移入が必須となり、機器の開発に関心が集まる結果に成っている。リハセンターには急性期から社会復帰、場合によっては終末期までの医療的ケアを備えた総合的なリハビリテーションセンターが必要か？リハビリテーションは必要。然し、施設の在り方は要検討。現在存在する施設群が個別な機能をシームレスに発揮できれば、施設数、サービス可能数の問題はあろうが有機的な調整・連携が可能となれば既に我が国では組織としては出来上がっている。

※ 保健⇒医療⇒急性期リハビリテーション⇒回復期リハビリテーション⇒生活機能訓練（含介護老人保健施設内生活訓練）⇒療護・療養⇒特別養護・介護、他に救護これらの連携協力が不可欠であるが、一般の施設は、各々が独立した機関として機能していることが多く、必ずしも相互の連携が取れていない場合が多く見られ、介護に関わる福祉分野との連携が不十分な場合が多い。

シームレスなサービスが受けられる保健・医療・福祉の関係が必要不可欠。

Impairment より ADL 重視？

ADL より QOL 重視？

QOL より 心身の豊かさ、安寧を重視？

すなわち、総合した本人の満足度を追及することの必要性を認識する必要性の啓蒙。

そのためには専門職の行なう医療的リハビリテーション手段の他、如何なる手段を尽くすか。

家族、ヘルパー、患者自身に以下を指導する。

- ・ Dysfunction を代替する為の福祉用具の積極的活用を考えるべき。
- ・ 介助・介護を素直に受入れ、自主性重視の自律生活に近づくべき。
- ・ 歳をとったら周囲の人達との絆を密に、孤独な生活から遠去かるべき。
- ・ 食事は命の燃料でもあり、心の栄養剤でもあります。食事は美味しく食べるべき。
- ・ 出来るだけ体を動かす。体操、ウォーキング、散歩、太極拳等の軽運動習慣を身に着ける。
- ・ 積極的に楽しいことに参加させる。 これらのことは心身を活性化する。
- ・ 健康運動指導士の参画。
- ・ 在宅者の維持的リハビリテーションのステージに訪問看護、マッサージ、柔道整復師等の医療類似行為者の参画も考慮すべき時代にあるのではないか？

これらの諸問題を解決することは喫緊の課題と考えられる。

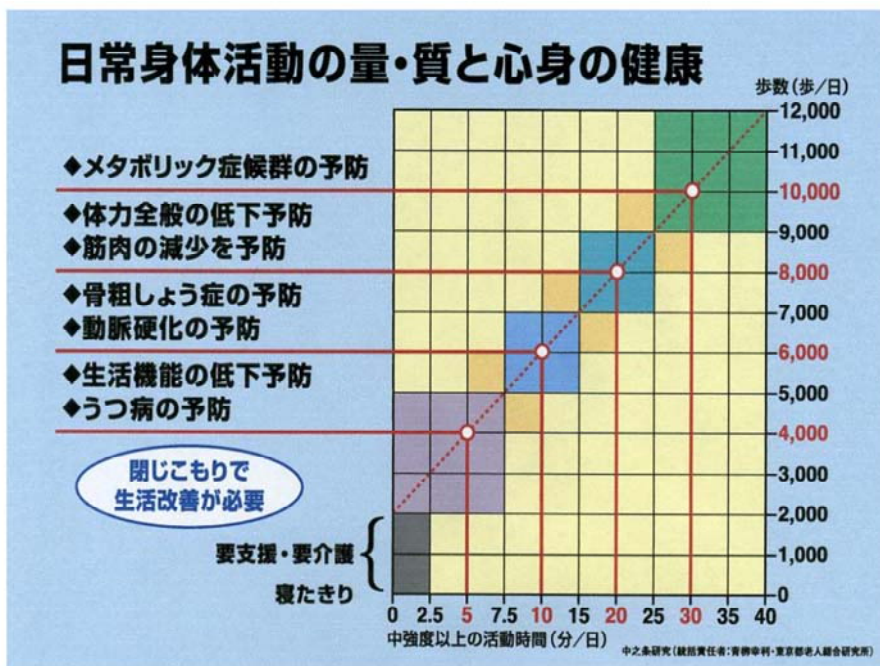
100歳まで足腰が衰えない生活習慣

順天堂大学大学院

加齢制御医学講座

白澤卓二

要旨：2008年の日本人の平均寿命は女性が86.05才、男性が79.29才で、日本は世界一の長寿国、人生80才時代に突入している。20世紀には平均寿命が50才から80才へと30才も飛躍的に延伸し、現在も延び続けている。双生児の疫学研究から、寿命が遺伝素因ばかりでなく、環境要因にも大きく左右されることが判明した。環境要因の中でも、生活習慣病の予防に重要な要因として栄養と運動と生きがいが寿命に影響を及ぼす3大要因であることが百寿研究から分かってきた。今回の講演では、100歳で元気に活躍していた、プロスキーの三浦敬三さん、102歳で日本舞踊を踊り続けていた板橋光さんの医学的データを提示し、どのような運動が高齢期のQOLを支えているのかを検証する。更に転倒・骨折の発症基盤にある骨粗鬆症を予防する為に、ウォーキングなどの定期的な運動が有効である事を示す疫学的調査を紹介する(図)。また、食事ではカルシウムの摂取の重要性、イソフラボン、ビタミンDの重要性に関して強調したい。



希望の革命始まるー超高齢社会を持続可能にするために

インターナショナル バイオフィリア リハビリテーション学会理事長
文部科学省指定研究機関バイオフィリア研究所教授
滝沢茂男

ワークショップバイオフィリア2011は、在ルーマニア日本大使館（外務省）、在日本ルーマニア大使館、ルーマニア政府観光局及び同東京支局等のご支援の下、2011年9月25日にルーマニア国ブカレスト市で開催されました。大会長は、同国の脊損学会および脳科学の先端研究を基礎としたニューロリハビリテーション学会の会長を務めるオノセ医学博士と、筆者が務めました。

ご挨拶に、駐ルーマニア大使館雨宮夏雄大使（代理高松伸充書記官）とルーマニア観光省エミリアン・インブリ参事官にご参加いただきました。ワークショップの価値を高めたと大変感謝しています。

さらに、駐日本ルーマニア大使館ペトレ・ストヤン大使から開催にあたり感謝状をいただきました。

このワークショップで、筆者は「希望の革命」の始まりを宣言しました。本年の大会を開催したルーマニアとポーランドは、共産主義の終しゅうえん焉に大きく貢献する革命を実現した国です。その革命の地で「希望の革命」を実現する。すなわち「高齢障害者が介護依存から自立を果たし、生活自立を前提とした社会を構築する」という、「人々と社会の在り方の革命・改革を実現する」スタートであるとししました。

本稿では、ルーマニアワークショップで行った基調講演を基礎に、「勝利をおさめる（持続可能な超高齢社会の構築）可能性」をご理解いただき、読者諸兄に共にその実現に努力していただきたいとの願いで、道程に沿って説明し今後を展望したいと存じます。



日本の社会保障制度と期待されるシナリオ

尾沢 潤一

(要旨)

日本の社会制度は軍人恩給や低所得者等への支援制度を手始めに、その後、医療保険、公務員年金、企業年金、国民年金等が拡充されてきたものの、近年高齢層の増加と若年層の低下、年金基金の運用利回りの低下などコストパフォーマンスの悪化が著しい。このため、毎年1兆円の負担増という構造要因があり、多額の基金と現行の保険料収入での運営では、先行きに不安が見られる。

これに対し、社会保障と税の一体改革ではコスト増のための増税や年金受給権利の緩和など制度維持、ポピュリズム的改革が進められている。

しかしながら、中長期で見た場合の日本の社会構造は、過去の高度成長、人口増加の時代に立ち戻るとは考えにくい。筆者は、国の安定性や国民の安心感の付与のためには、社会保障制度の簡潔でわかりやすい設計が必要であり、複雑で膨大な社会保険制度のための維持装置の見直しもこの際必要ではないかと考えている。そのため、本稿では、制度の抜本的な改革も含めた見直しのための提言を試みる。

国際学会の活動

CONFERENCE GREETINGS



Prof. Mieczyslaw Pokorski, MD, PhD, DSc.

International Biophilia Rehabilitation Academy

Clinical Research Center

Murayama Medical Center,

MusashiMurayama City, Tokyo, Japan

and

Medical Research Center,

Polish Academy of sciences, Warsaw, Poland

This greeting letter is to express my appreciation of the fact that the Biophilia Rehabilitation Academy is organizing the annual conference in Saitama.

I have been collaborating with IBRA, as a foreign professor on the International Board of IBRA, for about 10 years now, and I follow with great interest the progress, achievements, a continual activities of IBRA. The developments are really conspicuous. Most notably, the idea of Motivative Rehabilitation, a novel approach to medical rehabilitation putting strong emphasis on the patient's cooperation in the process of rehabilitation and his psychological desire 'for life' of as much high quality as possible, is catching on at the international forum.

The IBRA organizes conferences every year in various countries of the world, with broad participation of professionals, medical societies and organizations in the field of rehabilitation, edits a journal and proceedings, and another international journal is about to be launched. These achievements are to be admired. Rehabilitation is a continually evolving area of research, both basic and clinical. New information and data are being added at a fast pace. A number of publications and meetings appear every year, presenting the cutting-edge knowledge and approaches. The IBRA stays abreast of these developments. It makes a rare blend of a basic, technical, and medical research, which ensures a wide international interest. IBRA's activities are of the very high scientific level and may become a valuable source of novel ideas to be pursued by researchers in the field of rehabilitation.

I wish the participants of this BRA conference the best in the endeavor they pursue.